

問題意識の定義について Topic/Issue/CQ をめぐって

後藤 彰 (GOTOH Akila)

2001年総合政策学部サドリアゼミ学士卒業

2003年総合政策研究科サドリアゼミ修士修了

2003年7月現在フリーター

作成日：2003.7.10（2003.10.19改定）

はじめに

社会科学系の論文を書く際に重要で、中心となるものに「問題意識」がある。サドリアゼミにおいても良く語られ、良く混乱を招く。「問題意識、モンダイイシキ、もんだいいしき？」とゼミ生を悩ませる「問題意識」をどう定義するか？ Topic/Issue/Central Question（以下CQ）をどう定義するか？そもそもそれらは何なのか？

ゼミ在籍歴6年の現在フリーター（プータロー＋フリーター）が、これらの問いに応えようとしています。このペーパーでは、卒論・修士論文をサドリアゼミで書いた元学生が実体験に基づいてひとつの解釈と理解、そして問題意識の展開を示すものです。ここに書かれたものが「絶対」ではないことを最初に断っておきます。

以下では、まず問題意識の簡単な定義をします。それから、問題意識の定義の仕方を Topic/Issue/CQ から考えていきます。定義の例を2つ挙げます。例のひとつには筆者の修士論文を使い、筆者がどのように問題意識を定義したかを提示します。そして、その問題意識の構築がスパイラル・プロセスであることを提示します。これらの議論によって問題意識をどう定義するのか？という問いに答えるよう努めることがこのペーパーの目的です。

1 問題意識とは？

問題意識には二つのレベルがあります。書き手の原体験や強い動機から生まれる「興味・関心としての問題意識」と論文を上手に書く際に必要な「論点としての問題意識」です。前者は諸個人の原体験や興味・関心から生まれます。その人の中からしか出てこないオリジナルなものです。そして、この問題意識は「何でも良い」「全てに正統性がある」ということになります。「あなたの興味は何ですか？」が出発点です。後者は、学生として論文を書く際に必要となります。自分がフィールドとする分野で実際のレベルと理論のレベルでどのようなことが議論されているかをまずは把握します。それから、論文のオリジナルな論点を設定します。この論点が問題意識とも呼ばれます。これは論文に一貫性をもたらします。

「興味・関心としての問題意識」がなければ、技術的に上手な論文であっても「その人が論文の中に見えない」ということになります。誰でも書ける技術的に上手い論文です。しかし、心に訴えるものが残念ながら少ない。「論点としての問題意識」がなければ、「感情・妄想・イデオロギー」の主張になるでしょう。また、学生が「勉強して」書く論文としての正統性が欠如するでしょう。

この二つの問題意識が相互作用を及ぼしながら、問題意識が形成されていきます。両者は明確に区別できるわけでもありません。以下適宜使い分けますが、基本的には二つが合わさった問題意識として論じます¹。



問題意識はもらえません。それは創り上げるものです。

問題意識の基本的な特徴を二つ挙げましょう。問題意識の最初のステップとしては自分の興味関心や原体験、今後成りたい自分を「自分との対話」「他者との対話」を通して見つ

めていきます。この段階では個人的なことで構いません。根拠のない主張でも構いません。個人的なスタンスが重要なのです。そこからスタートして徐々にその分野に関する現状認識を作り、概念的な理解を深めていきます。たくさんの文献を読み、資料に当たる必要があります。学問の分野や知識の質は関係ありません。資料としては学術雑誌、ウェブ、新聞、ワイドショーネタ、ドキュメンタリー等々にアクセスしましょう。生の現実も重要です。その分野に出ていきましょう。イベントやワークショップ、研究会、当事者等々にアクセスしましょう。本の中は安全な世界です。あなたの認識や価値観を批判する存在はいません。現実の社会にはわんさかいます。そこから学ぶことも多いはずで、これらのプロセスの中で、研究の分野における自分のスタンス²も深まっていくでしょう。

試行錯誤の中で問題意識は螺旋状に、スパイラルに創り上げられていきます。

途中で認識が変わり、問題意識が変わることは自然なことです。その変わり方も A から A' になるという場合と、A から B になるという場合があるでしょう。どちらにも正統性があります。人生も問題意識もスパイラルです。重要なのはその人が人生でも論文でも「どうしたいか?」「何に価値付けをするか?」です。

¹ 例えば、「社会の中で知識は大事だ」というのは主張であり、個人的なイデオロギーを脱しません。が、様々な文献に当たり読み進めることによって、「社会の中で認識的な知識が重要だ。それが、現在の社会のあり方を分析し、理解した上で、異なる可能性をヴィジョンとして提示できるからだ」といった論点を創り出すことが出来るようになっていきます。

² 「スタンス」とは自分の立ち位置・立場のことです。これには大きく分けて2つの枠組みがあります。第1に、「個人的なスタンス」です。それはその個人の「信条や信念 belief system」と関係します。これには最終的には論理的には説明できない非合理的な価値も含まれます。第2に、「議論における立ち位置」があります。自分が研究する分野にある様々なアプローチを学び、自分がどういった位置から議論をするのかというスタンスです。例えば、知識を経済的な富を生み出すための道具として捉えるのか、社会の理解や認識的な蓄積そのものとして捉えるのかといった議論の中での立場を選ぶ必要があります。このスタンスはある程度読み進めなければ構築できません。既存の議論に乗っかることも可能ですし、自分で創り出すことも可能です。二つのスタンスともに相互作用を及ぼすものです。スタンスと聞くと固定的なものと思われるかもしれませんが、両方のスタンスも変わり得るものでしょう。文献を読み進め、生の現実につづかることで認識が変容し視野が広がっていくはずで、その中でスタンスも変化することの方がむしろ自然です。

2. 問題意識の定義 Topic/Issue/Central Question

スパイラルなプロセスの中で形成されてきた問題意識を、論文を書くために定義する必要があります。その際に有効なのが Topic/Issue/CQ という問題意識の狭め方です。

簡単にそれぞれを規定しましょう。

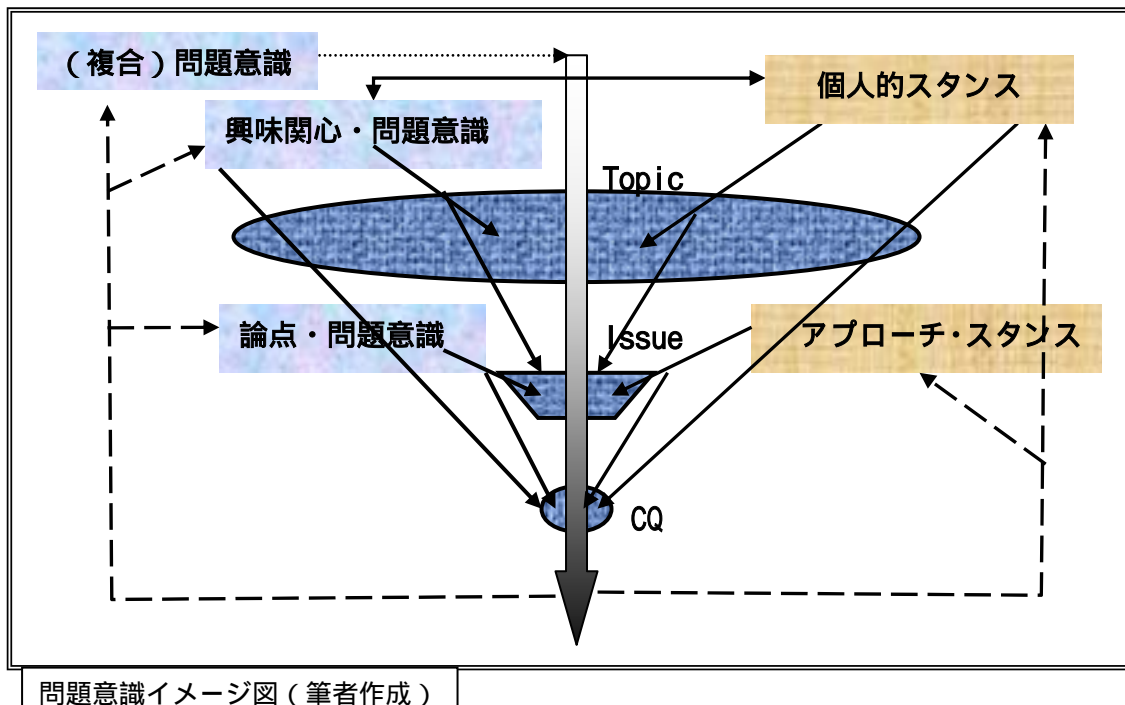
Topic : 研究のテリトリーです。どの分野については議論をして、どの分野については議論をしないのかを明確にします。

Issue : そのテリトリー内での研究の論点です。どんな要素、論点、ポイントを論じるのか？具体的なレベルで示します。

CQ : その Issue(論点)の中でも「答えたい」中心的な問いです。その論文を読むことによって「どんな問いに答えるのか？」ということをも1点のみ定義します。

このラインに沿って徐々に論文で論じることを狭めていくことになります。

下記の図が問題意識のイメージ図です。中心を貫く(複合)問題意識とは興味関心と論点が含まれたものです。濃淡は、問題意識の明確さを表しています。実線は影響力があることを意味しています。この実線をつなげるものは一般知識と専門知識です。破線は論文を書き進めるにあたって、問題意識やスタンスへの「跳ね返り(reflection)」が生じてそれらに変容するイメージです。



具体的な例を使って考えてみましょう。

例 1

Topic：中央大学総合政策学部の 11 号館のサドリア研究室にあるコップ
これを研究のテリトリーに設定します。ということは、11 号館の教授室の机については述べません。事務室の包丁についても論じません。あくまでも「サドリア研究室のコップ」が論じる「テリトリー」です。



Issue：サドリア研究室にあるコップの耐熱性

これが、論点になります。これは、「コップの取っ手」というようにテリトリーを狭めるわけではありません。「取っ手」になった場合は、論じる対象がより細かいものに移っただけです。イシューには「質」が関わってくると大きくは考えられるでしょう。そのテリトリーの中の特にどんな性質や要素、関係性などに注目するのか？を設定します。耐熱性は質的な要素です。

CQ：コップの耐熱性は学生に対してどのような良い側面を持つか？

イシューで狭めた耐熱性が「学生に対してどのような良い側面を持つか？」という問いに答えるのが論文の目的ということになります。「先生にとっての良い側面」や「学生にとって悪い側面」は論文とは直接関係ありません。この問いに対する答えとしては「熱いお茶でも飲める」「緊張し凍りついた空気を『アチッ』とか言って、なごませることができる」等々が結論として来る可能性があります。もちろん、分析の仕方や分析のツールによって結論は変化します。

この論文を書く際の個人的な興味や立場といったものを自由にブレインストームしてみてください。コップに異常な執着があるとか、実のところ興味は緊張し凍りついた空気の緩和にあったとか、いろいろ想像できますね。この論文を書く重要性といったものも想像してみてください。耐熱性が低いコップの導入が検討されているがそれに懐疑的で、耐熱性の良い点を明示したいなどなど。

<< 2通りの知識の扱い方 >>

金泰昌によれば、知識の扱い方には「受信普及型」と「発信共有型」があるという。受信普及型は、国内外の文献を読み漁り、それなりにまとめて普及させるものだ。当人の認識図式に合致するものをとにかく集めてくるというスタイルである。他方、発信共有型は経験や関心から考えをスタートさせる。そして、蓄積されている知識にアクセスし独自の理論枠組みやパラダイムを構築していくものだという。そして、他者との枠組み共有を図るという。その枠組みが通用しなければ別様の考え方を展開していくことになる。(佐々木 毅 / 金 泰昌編 (2002)『公共哲学 9 地球環境と公共性』東京:東京大学出版会 p247)

二つの立場の違いは問題意識があるかないかの違いでもあるでしょう。単に集めたものを普及させるのか、関心や経験から試行錯誤を繰り返し枠組みの構築とその共有を意図するか。その違いは大きい。

例2

より具体的な例を挙げます。題材は、後藤 彰(2003)「知識社会に関する分析 社会意識に基づいた知識の獲得、循環、そして生産」です。筆者の修士論文です。

以下では筆者が問題意識をスパイラルなプロセスで創りながら、Topic/Issue/CQ を定義していった過程を示していきます。

後藤(2003)では、序論 1-1「本稿の問題意識および目的と意義」の中で、問題意識は次のように最初に定義されています。

本修士論文の問題意識は知識が社会を規定・組織していくといわれる知識社会³における知識生産⁴にある。知識生産の中でも特に、「社会意識知識生産 (social consciousness knowledge production)」と本稿が定義するものに焦点を当てる。それは、「共に生きる領域としての社会」を意識し、欲しながら、現実を分析的に理解、問題化し、そして別様の可能性をヴィジョンとして提示するというを中心に据える知識生産のあり方である。この社会意識知識生産は知識の道具的・技術的側面よりも、認識的側面に重点を置くものである。本稿の目的は次のものである。すなわち、現代日本社会における NGOs や NPOs、ネットワークといったアクターが知識生産を含む知識活動⁵に対してどのような意識や意見を持ち、どのような知識活動を行なっているかを分析することで、これらのアクターが持つ社会意識知識生産への限界と可能性を把握し若干の提言を結論として述べることを目的とする。NGOs などのアクターを見ることを通して、現代日本社会における知識生産一般と社会と知識の関係性に関する含意も副次的に示すことが可能となるだろう。(p. 4)

極限状態で書いたものであるため日本語が分かりづらく読みにくいですが、これを題材とします。

では、問題意識を絞り込んでいったステップを見ていきましょう。この修士論文に取り組むことになった「興味・関心として問題意識」は知識に対する個人的な興味・関心です。簡単に言えば「理論的なレベルや分析的なレベルで研究すること」の意味・意義を突き詰めてみたかったのです。周囲から「そんなに勉強をしても意味がない」とか「頭でっかちだ」といった批判を良くされていたのですが、自分ではそれを容易に受け入れることはできませんでした。そして、「何か意味があるはずだ」と思い続けていました。「自分が研究する意味は何なのか？」

³ 知識社会とは簡単に言えば、経済や政治、教育、文化などの領域で知識が大きな力を持つ社会です。一般的な議論としては、農業社会 産業社会 ポスト産業情報社会 高度情報社会といった流れの中で現在は「知識社会」が到来したというものです。遺伝子組み換え技術やコンピューターのソフト開発ノウハウ、金融商品の開発といったことには情報レベルではなく高度な知識が必要とされます。その知識を握っているかどうかは経済的・社会的な成功の鍵だといった議論がなされています。これは知識経済といった文脈からも語られます。そこでは知識は往々にして道具的なものとして考えられています。後藤(2003)ではこの知識社会の捉え方に批判的です。

⁴ 知識生産とは単純化すれば、研究開発や研究調査などを通じて新たな知識を創り出すことです。

⁵ [修士論文の原注]理論編で詳述するが、本稿は知識を生み出したり伝達したりするものとして「知識活動」を大きな枠組みとして捉え、その中に新しい知識を生み出す「知識生産」と新しい知識は生み出さないが知識を社会の中で流通させる「知識循環」という枠組みから捉えている。

「社会にとって研究とは何なのか?」、「社会や自分にとって知識とは何なのか?」そんな疑問から自分が研究するフィールドが「知識」になったわけです。同時に、自分がこれまで関わりを持ってきて、今後も関わり続けたいと思っている新しい社会運動的な要素を持った NGOs や NPOs も研究のフィールドからは外せませんでした。そこには草の根から社会のあり方を批判的に捉えたり、具体的な対案を示したり、別様の仕組みを創り出したりといった動きが社会をより良くしていくという個人的なスタンスがあります。また、そういった領域にいる人々が魅力的であり、さまざまな刺激をもらってきたということも大きな点です。そのため、NGOs など研究のフィールドに盛り込むことになっていきました。

これを出発点にして、学問の世界で議論されていることや現実に行われていることにアクセスし始めました。「知識生産」「知識」「知識社会」といった概念を研究したり、NGOs や NPOs がどのような知識を作っているのか? イベントなどにおいてどういった議論をしているのか?といったことを実際に参加したりしながら調べました。これらのプロセスは「興味・関心としての問題意識」と「論点としての問題意識」を相互作用させながら「問題意識を創る」ことを意味しています。このプロセスは修士論文を書き上げるまで続きます。さらに言えば、書き上げた後も続きます。恐らく、死ぬまで続けます。

問題意識を創るプロセスは
(人によっては)
一生続けるものである。



では、以下で Topic/Issue/CQ をどう設定していったかを見ましょう。

Topic の定義

便宜的に定義すれば、研究によって論じる範囲(テリトリー)です。イントロダクションなどで論じる最も広い範囲の定義です。

筆者は「知識」に関する興味・関心から出発しましたが、Topic はどう定義されているでしょうか? 上記の引用文を参考にすると、<知識社会における知識生産>ということになります。このようにテリトリーを定義したため、「知識社会における情報生産」は論じません。「農業社会における知識生産」も論じません。テリトリーからは外れるからです。論じるのはあくまでも「知識社会における知識生産」です⁶。

⁶ イントロダクションでは、問題意識の重要性や意味を説明するためにさまざまな議論を展開する必要性も生まれます。イシューとは直接関係していないような議論も「必要だ」と書き手が判断すれば、盛り込まれるのです。例えば、後藤(2003)では、中心に論じ分析の対象となるのは NGOs などのアクターによる社会意識知識生産なのですが、知識生産の現状を紹介するために、国家、企業、大学、シンクタンクによる知識生産一般の議論を提示してあります。なお、これらの議論はトピックの範囲内と考えて良いでしょう。関係する議論が「必要かどうか」の判断は書き手がするものです。論文の流れがずれると思われる場合は、脚注を積極的に用いることが有効でしょう。なお、このペーパーの中では論文の構造に関する議論は全て脚注に回しています。問題意識からずれるからです。

Issue の定義

Issue を便宜的に定義すれば、イントロダクション以降の理論編、事例編、分析編の中心になる狭められた論点です。論文全体を貫き、始めから終わりまでを統括する軸となります。一般論を超えた具体論を定義するということでも表せるでしょう。

Issue ではトピックを狭めつつも質や要素、関係性を取り扱います。後藤(2003)では、issue は「現代日本社会における NGOs や NPOs、ネットワークといったアクターによる社会意識知識生産の内容の強度」ということとなります。つまり、実際に現代日本社会において【時間と空間 (When and Where)】、NGOs などのアクターが【主体(Who)】、どのような内容の社会意識知識生産をしているのか【何を(What)】を中心に論じることとなります。

「知識社会における知識生産」というトピックからは、「営利シンクタンクによるお抱え知識生産の欺瞞性」や「国家による国際産業競争力強化のための知識生産の戦略」、「経団連などによる経済的な富を指向する知識生産の戦略」、「大学における知識生産の失墜」といった 이슈も立てることはできます。しかしながら、それは筆者の興味・関心の中心にはないため「中心となる論点」からは排除することとなります。

イシューである「社会意識知識生産の強度」が具体論となります。知識生産のプロセスや影響力といった「質」をイシューとすることも可能でしたが、「結局どういった知識が生産されており、それがどう評価できるか？」という点に興味があったため「強度」に論点を絞りました。なお、強度とは知識の持つ強さや説得力を意味しています。

CQ の定義

便宜的に定義すれば、理論枠組みによる分析を経て論文で答える中心的な問いです。

上記の Issue に取り組むために、より具体的な問いを設定しました。「現代日本社会における NGOs や NPOs、ネットワークといったアクターが知識生産を含む知識活動に対してどのような意識や意見を持ち、どのような知識活動を行なっているか？」というものです。あるいは、<社会意識知識生産という理論枠組みから見た場合に、現代日本社会の NGOs などのアクターが行なっている知識活動はどのように評価できるのか？>という CQ を立てました。つまり、分析道具としての理論枠組みを用いたら、NGOs などが行なう社会意識知識生産の強度はどう評価できるのか？ということでした⁷。

⁷ CQ をこのように設定したからには、それに対応する分析の道具が必要となります。理論編では、二つの枠組みを構築しました。「知識活動」というものを新たな知識を生み出す「知識生産」と新たには生みださないが翻訳などを通して伝達する「知識循環」という二つに分けました。NGOs などが行なっていることが「そもそも新しい知識を生み出す知識生産足り得ているのか？」を前提として把握する必要があるためです。そして、「社会意識知識生産」という枠組みを理論のモデルとして構築しました。なお、そのモデルは「共に生きる領域としての社会」を意識し、欲しながら、現実を分析的に理解、問題化し、そして別様の可能性をヴィジョンとして提示するということを中心に据える知識生産のあり方である(p.4)ということとなります。これを知識生産のモデルとして理論編で展開してあります。具体的には、社会意識知識生産の「構成要素」であるとともに、社会意識知識生産が成された時に生み出される要素でもある「関心」「認識」「リビング・トゥゲザー」「分析的理解」「問題化」「ヴィジョン」というサブ概念を組み合わせると一つの理論枠組みを構築しました。

このように CQ を立てたため、分析の対象も明確になってきます。「NGOs などによって生産された産物としての知識」、具体的にはウェブ、雑誌、書籍、などにおけるテキストデータが直接の分析対象としてオーガナイズされました。強度を評価するわけですから、生産されたものを検討する必要があるわけです。

ですから「強度の重要性は何か？」や「強度の測り方にはどんなものがあるか？」といったことには取り組みませんし、答えません。中心的な問いとはズレるからです⁸。
今一度、後藤（2003）の問題意識を確認すると次のようになります。

| | |
|-------|---|
| Topic | 知識社会における知識生産 |
| Issue | 現代日本社会における NGOs や NPOs、ネットワークといったアクターによる社会意識知識生産の内容の強度 |
| CQ | 社会意識知識生産という理論枠組みから見た場合に、現代日本社会の NGOs などのアクターが行なっている知識活動はどのように評価できるのか？ |

3. 問題意識定義のスパイラル・プロセスとプロブレマティゼーション

このように Topic/Issue/CQ を設定したのは、問題意識を創るスパイラルプロセスでさまざまなことを考え、行動してきたからです。すでに書いたように、出発点は「自分や社会にとって知識とはどういった意味があるのか？」という素朴な問い掛けでした。この出発点から最終的な論文に仕上げるまでのスパイラルを簡単に追ってみましょう。その際にプロブレマティゼーション (problematization) = 問題化ということがどのようになされるのかを意識しながら見ていきます。プロブレマタイズすること（問題化すること）は何故、現在このイシューを論じることが重要なのかを提示することでもあります。以下ではまずプロブレマティゼーションについて簡単に説明し、問題意識のスパイラル・プロセスを見ていきます。

3-1: プロブレマティゼーション とは

プロブレマティゼーションとは「問いを立てる (problematize)」ということです。あるいは「問題を設定する (problem setting)」ということです。つまり、知識の積み重ねや思考の積み重ねによって「何が問題であるのか」を定義するということです⁹。問題化には大きく分けて二つのアプローチがあります。第1に、権力関係や抑圧構造といったものを可視化する、暴露して見せるというものです。それまで当然とされていた事柄を別の視点から見ることによって問題と捉えるのです。第2に、議論の対象を構成するという問題化もあります。それまで語られなかった事や明確には認識されていなかったことを把握する枠組みを提供し、議論の対象として構成するのです。この場合、議論の対象が権力構造や抑圧構造と必ずしも重なりません。社会の中にあるポジティブなダイナミクスを対象として構成することも問題化となります。簡単に言い換えれば、社会の中にある「ネガティブな事柄を問題」として定義するか、「ポジティブなダイナミクスを問題」として定義するかということです。両者の問題化が相互作用する

⁸ この論点に関しても、「必要」があれば sub questions としては取り扱うことが可能です。しかし、あくまでも sub ですから、分析の道具に対応した CQ とは別の扱いになります。

⁹ 社会現象を問題化して論じる際には、次の方法が有効な場合があります。時系列での変化を見る。例えば、60年代と00年代では自分の興味はどのように変化しているのか？変化していない点は何か？それらの変化と非変化は何故生じているのか？といった問いの創り方です。それによって、現在生じている現象の特殊性を分析し、理解することも可能になります。また、同じ時代区分において複数のケースを比べることでそれぞれの特殊性を分析し、理解する方法もあります。イメージしやすいのは外国の諸ケースと日本の諸ケースを比較検討することでしょう。

場合もあります。なお、後者は往々にして権力関係を批判的に捉えなければ上手く重要性やダイナミクスを示すことができません。「問題」と聞くとネガティブなもののみを思う浮かべがちですが、言葉を換えれば “What is at stake?” ということです。

3-2: 問題意識定義のスパイラル・プロセス


問題意識を定義するには「読む」「フィールドへ出る」「考える」「議論する」といったことの繰り返しが必要になります。それ自体がスパイラルなプロセスです。ここでは、後藤(2003)がどのようなスパイラル・プロセスを経てきたかを問題意識の定義あるいは深化と重ねて追っ

ていきます。
筆者は修士論文の作成初期にフィールドを「知識生産」に絞りました。知識生産を語る前提として「知識の概念」や「知識社会」について研究しペーパーを書きました。これらのペーパーを書いた段階で、知識や知識生産、知識社会が十分に理解されたわけではありません。不十分な理解のままです。その後自分のフィールドに関して読み進め、他のトピックについても研究していくプロセスの中でさまざまな文献に当たっていきます。その中でさまざまな知識や文献がつながりを持ち、「知識」や「知識生産」「知識社会」への理解が厚みを増してきます。


自分のスタンスとは相容れない議論もたくさん読む必要があります。批判の対象のロジックを内部から知らなければ、説得力のある批判は生まれません。単なる誤解や直観的・感情的・独善的な批判に陥る可能性もあるからです。また、漠然と「これは嫌な感じがする」といった批判ではなく、細かなポイントを批判できるようにします。

批判の対象として「テクノクラシーによる知識生産」や「シンクタンク、官製 NGOs による知識生産」といったことも研究しました。そのプロセスの中で、それらの知識生産のあり方を徹底的に批判する論文を書くという構想も生まれました。その場合トピックは大きく変わりませんが、イシューは「テクノクラシーによる知識生産と概念の誤用」といったものになる可能性があります。この論点自体は非常に重要です。例えば、テクノクラシーは「民主主義」という概念を多用しますが内容的に明確な検討を避け、曖昧なままに心情に訴えるといった知識の生産、知識の流用をしていると考えられるからです。しかしながら、筆者の個人的な興味・関心である NGOs などのアクターを論じるという点を外したくなかったため、このイシューは取りませんでした。

論じるアクターとして絞った NGOs などの知識生産を見ていく内に、< 鍵を握るのは運動と知識をつなぐ「有機的知識人」なのではないか? > と考えるようになりました。するとイシューに「知識人」という要素が入り込むことになります。しかしながら、「知識人」という要素を入れることによって、論文は「知識人論」の様相を帯びます。イシューも「NGOs などの知識生産に関わる知識人が持つ社会意識の内容」といったものになる可能性があります。しか



一般知識が強ければ強いほど、議論の基盤が強くなる。



批判の対象の議論を内側から知ることが必要である。

し、筆者の興味は知識人よりも、「生産された知識そのもの」にあると強く感じたため、このイシューも取りませんでした。

NGOs などの知識生産の内容を吟味しているプロセスで、その内容的な乏しさを意識するようになりました。あまり、強い議論や知識の生産ということがなされていないと感じたのです。本格的な著作や批判的な論考などは少なくほとんどは簡単なブックレットなどです。そこから、専門的で洗練された知識を形成する可能性を持つ「大学」という要素を盛り込んだらどうかを考えました。イシューは「大学と NGOs などのアクターの協働による知識生産のプロセス」といったものになる可能性があります。しかしながら、時間的な制約から大学を新たに論じることの難しさと、大学が NGOs と協働しているケースがすぐには見つからなかったためこのイシューも取りませんでした。

こういったプロセスを経て、最終的なイシューに到達したわけです。イシューに至るにあたって、後藤(2003)の問題化がどう行われたかについて軽く触れておきましょう。権力構造を見るための問題化としては「< 現在主流となっている知識生産の在り方は、知識を生産できる層とそうではない層の間に社会的な格差を生み出す危険性がある > という問題を設定しました。実際に、知識にまつわる社会の二極化は知識を吸収する教育、知識を行使する仕事、知識を生産する知識生産の領域で発生しています。そして、現在大いに語られ実践されている知識生産は、< 経済的な富を生み出すという目的のための道具的な知識 > に収斂しています。この知識社会の流れと弱肉強食的な競争をもたらすネオリベラル的グローバル化¹⁰という社会的な流れが結びつくことで社会の二極化が進んでいくことが考えられます。知識の力によって社会が二極化していく。この状況を問題として設定したわけです。社会の二極化は「共に生きる領域としての社会」を空洞化させるからです。

しかし、イシューとしてはこのネガティブな問題状況を批判するという方向性は取りませんでした。知識による社会の二極化が進む中で、社会意識知識生産と定義した知識生産のダイナミズムをポジティブな方向性で問題化し、イシューとしたからです。社会を定義していく力を持つ「知識生産」が余りにも狭い語られ方をしており、経済合理性の追求に傾いているため、別様の知識生産である社会意識知識生産の枠組みを理論レベルで示し、その存在を分析し、評価することをしたかったのです。社会意識知識生産は「共に生きる領域としての社会」を欲し、その意味でより良い社会を意識し、社会を分析的に理解し、問題化を行い、オルタナティブなヴィジョンを提示するという枠組みです。ここでは知識の道具的な機能ではなく、認識的な機能に注目しています。認識的知識が厚みを増すことで文化や社会制度、人々の行動といったものは変容していく可能性があります¹¹。

この議論を展開することで、知識社会や知識生産を考察する際の新しい枠組みを提示し、議論を組換える可能性が生まれます。社会意識知識生産の重要性を「対象」として構成すること

¹⁰ ネオリベリズム(新自由主義)の主要な特徴として、自由な市場原理の貫徹と自己責任の要求、公的な福祉の切捨てなどがあげられます。自由の中で教育や仕事、知識生産において知識面で遅れをとることは自己責任とされ、落ちこぼれようが、仕事にあぶれようが、知識生産で差が付こうが公共的な支援はされません。道具的に知識を作り出し扱えるような資本を持っているものや競争に勝つ層と負ける層で格差が生まれます。

¹¹ 実際に、認識的な知識の積み重ねから「地域通貨」や「社会的責任投資」、「エコバンク」、「スローライフ」といったさまざまな実践や制度が立ち上がっています。



書き手の認識やスタンスは
スパイラル・プロセスとともに
変容し、深化する。

ができると考えたのです。これが筆者による問題化です。権力構造の問題化とポジティブな可能性の問題化を相互作用させてあります。

今一度、最終的な 이슈を提示しておくとして現代日本社会における NGOs や NPOs、ネットワークといったアクターによる社会意識知識生産の内容の強度>ということになります。そして、CQ は<社会意識知識生産という理論枠組みから見た場合に、現代日本社会の NGOs などのアクターが行なっている知識活動はどのように評価できるのか?>というものにしました。この 이슈と CQ が問題化に対応していることを確認して下さい。

論文を書き終えて筆者の認識は変容し深化しました。NGOs のみでは強度のある知識生産は人材、知的資本、資金面で限界があるということが分かりました。知識生産の中心機構である大学や知識人との連帯や知識を要求しあったり、生産された知識を批判しあったりするような知識のネットワーク化も社会意識知識生産には必要だというスタンスに現在は立っています。

ここまでで、問題意識定義のスパイラル・プロセスと問題化について見てきました。始めから 이슈を固定してそのみに集中するというのではなく、あくまでもスパイラルに試行錯誤を繰り返すことで書き手の認識や意見、議論といったものが形成され明確になってきます。そのプロセスの中から問題化も生じるでしょう。このポイントは論文を書く際のひとつの醍醐味でもあるでしょう。

4. おわりに

以上ここまでで問題意識とは何か?それをどう定義するのかということについて議論してきました。具体的に後藤(2003)の論文を参考にしながら、問題意識形成のスパイラル・プロセスも見えてきました。このペーパーを読んで少しでも「問題意識」に関する理解が深まれば幸いです。しかし、このペーパー上での定義は絶対ではありません。1つの解釈と理解でしかありません。重要なのは、書き手諸個人が自ら工夫しながら問題意識と遊び、格闘し、自分自身と問題意識を形成していくことです。論文を書くということは、アーティスティックな営みです。その営みの出発点は、「個人の興味」です。一人一人が世界をどう見たいか?どう考えたいか?どう良くしたいか?どう生きたいか?という個人的なスタンスです。それを社会的に蓄積されている財産である知識を利用しながら人に「論理的に伝える」というのが論文です。そして、その中心に据えられるのが問題意識なのです。

問題意識形成と論文形成のための参考文献

澤田昭夫 (1977) 『論文の書き方』東京：講談社学術文庫.

マニュアルが嫌いな方も、「論文をどう書くか」という本を1冊読むことを勧めます。曖昧に理解している「論文とは何か?」ということが明確になるでしょう。相対的な眼で自分たちが取り組んでいることを見ることもできます。

野矢茂樹 (1997) 『論理トレーニング』東京：産業図書.

論文を書く際の論理展開などにおいて非常に役立つようです。

大谷信介 / 木下栄二 / 後藤範章 / 小松 洋 / 永野 武 編著 (1998) 『社会調査へのアプローチ 論理と方法』京都：ミネルヴァ書房.

「社会科学系の論文を書く」ということや「調査研究とはどういうことなのか」を明快な言葉で説明しています。データをどのように集めて扱うかということも理解できるでしょう。

Deacon, Roger (2000) ' Theory as Practice: Foucault ' s Concept of Problematization ' , *Te/os* 118: 127-142.

Problematization について概念的に論じた論文です。M・フーコーを使いながら問題化ということがどういった意味なのかを議論しています。

森岡正博 (1998) 「総合研究の理念 その構想と実践」『現代文明学研究』第1号：1-18.

サドリアゼミで語られている「問題意識」が別の角度から議論されています。ウェブ上で公開されています。

<http://www.kinokopress.com/civil/0101.htm>

cf: 後藤 彰(2003) 「知識社会に関する分析 社会意識に基づいた知識の獲得、循環、そして生産」

<http://sadria.cside.com/storehouse/akilagotoh-master-introduction-knowledgesociety2003.pdf>
(上記はイントロダクションの URL その他のパートは <http://sadria.cside.com/storehouse/> からアクセス可能です。)